

令和五年度 博士論文（教育学）

浦辺史の「三位一体の保育運動」  
—保育研究・保育所づくり・労働運動—

【要約】

学習院大学大学院人文科学研究科

教育学専攻博士後期課程

中山佳寿子

Kazuko Nakayama

## ●目次

### 序論

1. 研究の主題 ▶ 1
2. 先行研究の検討 ▶ 5
3. 課題と方法 ▶ 16
4. 論文の構成 ▶ 30

### 第Ⅰ部 啓蒙から自己教育へ ―変革の挫折と共同の力の実感―

#### 第1章 新教育と同僚性から生起する学校の民主主義

- はじめに ▶ 37
1. 教師生活への一步 ―浅川小学校時代― ▶ 43
  2. 新たな授業実践の試み ―潤徳小学校時代― ▶ 50
  3. 潤徳小学校における同盟休校事件 ▶ 57
  4. 教師グループへの接近 ―五日市小学校時代― ▶ 63

#### 第2章 『新興教育』の編集と執筆 ―学習による教師の連帯と変革への試み―

- はじめに ▶ 69
1. 新興教育運動への参加 ▶ 77
  2. 『新興教育』記事にみる浦辺の考え ―学習による連帯と社会の変革― ▶ 83
  3. 人々から「浮び上る」教育運動の挫折 ▶ 88
  4. 「文部省左傾学生生徒の手記」に見る浦辺の思想 ▶ 92

#### 第3章 東京帝国大学セツルメントにおける実践

##### ―知識層による啓蒙から共同による「自己教育」へ―

- はじめに ▶ 96
1. 教育運動から東京帝国大学セツルメントへ ▶ 102
  2. 東京帝国大学セツルメント託児所における実践 ―三つの改革と保母との共同― ▶ 108
  3. 『児童問題研究』執筆記事にみる共同と学び ▶ 118
  4. 後年の浦辺との関連 ▶ 132

#### 第4章 社会事業への目覚め

- はじめに ▶ 134
1. 天照園における実践 ―「スラムの子供と生活して」の日々― ▶ 141
  2. 『学齡前児童の諸問題』 ▶ 147
  3. 社会局寺島方面館方面係から社会事業研究所へ ▶ 152
  4. 『本邦保育施設に関する調査』（1943年）について ▶ 159

### 第Ⅱ部 「三位一体の保育運動」論への軌跡

## 第5章 終戦後5年間における民主主義の模索

### — 民主保育連盟創設と家庭科教科書づくりを通して —

はじめに > 171

1. 背景と先行研究 176
2. 「二つの研究所」と民主保育連盟 > 179
3. 総合生活文化研究所における調査 > 185
4. 家庭科教科書作りにおける「民主主義」の探究 > 187

## 第6章 深化する自治と共同の考え

### — 国立身体障害者更生指導所における実践 —

はじめに > 194

1. 国立身体障害者更生指導所について > 198
2. 国立身体障害者更生指導所における実践 > 199
3. 職員同士の連帯 > 202
4. 『からだの不自由な子ども』にみる浦辺の問題意識 > 203

## 第7章 社会福祉研究と保育者養成教育にみる保育運動への志向

はじめに > 204

1. 日本福祉大学における「大学づくり」 > 208
2. 社会福祉論の探究 > 224
3. 伊勢湾台風救援活動とヤジエ・セツルメント > 236
4. 保育者養成への取り組み > 244

## 第8章 「三位一体の保育運動」論の形成

### — 研究運動・保育所づくり運動・労働運動の相互循環 —

はじめに > 249

1. 「三位一体の保育運動」論における「保育研究」 > 254
2. 「三位一体の保育運動」論の形成 > 266
3. 保母労働運動への関わり > 282

## 第Ⅲ部 「三位一体の保育運動」以降の展開

## 第9章 全国民間保育団体合同研究集会と「新しい保育」の探究

はじめに > 301

1. 全国民間保育団体合同研究集会（「保育合研」）の誕生 > 305
2. 「保育合研」の発展と「三位一体の保育運動」の消滅 > 315
3. 「保育所づくり運動」のゆくえ —こぐま保育園の創設— > 328

## 終章 結論と残された課題 350

- I. 本論の総括 > 352

II. 研究課題の検討と考察

1. 思想と実践の展開 ➤ 357
2. 「新しい」保母の五つのモデル ➤ 365
3. 「三位一体の保育運動」の構造 ➤ 367

III. 本研究の意義と示唆 ➤ 368

IV. 残された課題 ➤ 371

註 ➤ 373

参考文献 ➤ 457

※本論文は今後 5 年以内に刊行予定であるため、以下の要約と参考文献のみを示す。論文中の概念図等は、ここでは非公開とする。

## ●本文要約

### <序論>

浦辺史は、戦前と戦後を通して保育運動を長期にわたり牽引した保育研究者である。浦辺史の戦後の保育への貢献を特色づけるものは三つある。一つめは、保育研究運動、保育所づくり運動、保育者の労働運動という三つの運動を関連させより大きな運動へと導くという「三位一体の保育運動」の推進である。二つめは保育者と保護者の学習と共同が民主主義を醸成するという思想である。三つめは「新しい保育」の希求である。「新しい保育」は他の二つの目的である。一つめに含まれる保育者の労働運動は戦後にくわわった要素であるが、この要素をのぞいて、すべて戦前に源流を持つ。特に一つめに含まれる保育研究運動と二つめの共同に関する思想、三つめの「新しい保育」は、戦前の無産者託児所及び東京帝国大学セツルメント託児部に代表される「新しい民主的保育所」の経験から生まれた。

本研究の主題は、浦辺の「新しい保育」の源流と展開を、戦前から戦後にわたる教育実践、保育実践、調査・研究の経験のうちを探り出すとともに、「新しい保育」の探究過程で形成された「三位一体の保育運動」論が、保育史上にもたらした創造的価値を浮彫りにすることにある。

浦辺史の実践の出発点は、小学校教師時代の「悪い社会」を教育によって変えるという志にあり、その後教育から保育へと実践の場を移してからも、社会変革への志向は1980年代まで変わらなかった。保育運動は、浦辺史にとって民主社会を実現する「新しい保育」への具体的過程であった。戦前、城戸幡太郎が教育のために家庭や社会を再構成しようとした、つまり社会・文化の自己革新運動を保育研究の基盤としたのに対して、浦辺は反対に「新しい保育」を探究する営みそのものが社会変革を起こし民主社会を実現する道程であると考えていた。

これまで浦辺史を対象とした研究は、それぞれ限定的な時期における実践と著作、行動について検討されてきた。『学齢前児童の諸問題』（1936年）に示された家庭観の先見性を指摘した諏訪義英、東京帝国大学セツルメントの実践の本質と戦後の全国民間保育団体合同研究集会（「保育合研」）への動きを叙述した宍戸健夫、小学校での教育実践と新興教育運動を浦辺から聞き取った内容も補いつつ検討した柿沼肇はいち早く浦辺史に着目した研究者である。また、東京帝国大学セツルメント託児部時代の実践や社会事業研究所で発表した試案「戦時保育施設標準設定のために」（1942年）を戦前の保育運動に位置づけた浅野俊和、東京帝国大学セツルメントと戦前の保育問題研究会及び戦後の民主保育連盟の連続性を、浦辺史、塩谷アイ、畑谷光代、城戸幡太郎などの証言により重層的に示した松本園子、浦辺の家庭科教育への試みの先進性を指摘した青木香保里の研究は、いずれも一定の時期を深く掘り下げた研究である。（先行研究については該当章の「はじめに」でさらに詳細に取り上げた。）

上記の限定的な時期を焦点化して取り扱う先行研究に対して、本研究は、浦辺の実践と行動、著作を、生涯を通した「新しい保育」の探究の軌跡として形成的に捉え、さらに戦前から戦後にわたり貫いた社会変革への志を軸として検討するものである。

くわえて指摘したいのは、これまでの保育史研究、保育運動史研究において、保育研究と労働運動の相互関係が保育運動全体に及ぼすダイナミクスが論じられてこなかった点である。その理由は浦辺史の「三位一体の保育運動」論が見過ごされ検討の俎上に乗せられなかったこと

にある。本研究は、「三位一体の保育運動」論の形成過程と運動の経過を検討することにより、上述のダイナミクスを解明する。

浦辺史の「三位一体の保育運動」（1962年）は、保育所の不足や保育内容の向上、保育者の劣悪な労働環境の改善を求めて提唱された、保育研究運動、保育所づくり運動、保育者の労働運動が連動しながら一つの大きな潮流の形成を目指す、という運動の手法かつ理念である。浦辺史の「三位一体の保育運動」を主題とする本研究は、保育運動が政策決定や制度改善に影響を及ぼす勢力に発展するための条件、すなわち保育運動の核心を掴む一助となる。

本研究の特徴は二つあり、一つは浦辺を特定の時期において捉えるのではなく、1920年代半ばから1970年代という長期にわたる実践、研究、保育運動への取り組みを、「新しい保育」による社会変革の道程として捉え、検討する点にある。もう一つは、これまで保育史研究、保育運動史研究で言及されてこなかった、戦後の保育運動における、保育研究運動と保育者の労働運動の相互関係の解明と意義を提示する点にある。

本研究では、「新しい保育」が発想された時期の描出と戦後への影響、戦後の浦辺の「三位一体の保育運動」論の意義という主題を、1920年代半ばから1970年後半にいたるまでの浦辺史を、従事した職ごとに時期区分し、それぞれの実践や行動、執筆記事や論文にあらわれた考えを形式的に捉える。ただし、「三位一体の保育運動」を提唱した1962年の前後の時期については、浦辺の仕事が多岐に渡るため、日本福祉大学における研究と保育者養成教育を中心とした第7章と、保育運動へ取り組みを中心とした第8章と二つの視座から捉えることとした。

9つの章で主題に対する考察を行う軸として、課題を三つ設定した。一つめは、小学校教師時代に灯され生涯消えることのなかった社会変革への意識の変遷を、戦前、戦後の保育研究・保育者養成・保育運動の仕事のなかに探り出すことである。二つめは、浦辺が公私双方で目指した、生活の共有と学び合いによる民主的な人間関係の生成を、具体的な出来事から叙述することである。三つめは、昭和初期から1970年代までの道程において、それぞれの時代に浦辺が抱いた「新しい」保育者像の変容を描出することである。

## <第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部>

第Ⅰ部では、1925年から1943年までを第1章から第4章において検討した。

第1章では、浦辺の小学校教師時代の教育実践と同僚との共同生活の詳細を考察した。最初の赴任地である多摩郡の浅川小学校で、浦辺は農村の子どもたちの貧困に胸を痛めペスタロッチの「悪い社会」を変えるという思想に心酔した。同僚との共同生活のなかで、浦辺は『教育問題研究』に影響された新教育の教育実践と研究、地域の人々との交流を深めていった。浦辺は小学校教師時代の教育実践と同僚との共同生活の経験によって、個性と自主性を育む場としての集団、生活の共同による対等で民主的な関係の生成、という生涯の実践と研究のテーマを得た。特に前者は、集団のなかで育つ子どもという、浦辺の「集団保育」モデルの根拠となった。

第2章では、新興教育研究所の所員として新興教育運動に身を投じた1931年7月から1932年10月の時期を中心に扱った。不当誹首によって教師の道を断たれた浦辺は、特別高等

警察を警戒し住居を転々とする暮らしを送りながら機関誌『新興教育』の編集や執筆に携わる一方、同研究所の組織内部の矛盾と、知識層が大衆の階級意識を扇動するという、上からの啓蒙の限界に悩む。特別高等警察に捕らえられた後、浦辺が手記に描いた啓蒙の手法は、農民が自らの手で教育を行うという方法であった。この時期、マルクス主義への期待感や教育運動と大衆の乖離によって失望へと変わった。第2章では、浦辺の教育運動の試みと挫折が、浦辺が東京帝国大学セツルメントで構想した啓蒙と地域の変革の礎石となったことを示した。

第3章では、浦辺が保育に「開眼」した東京帝国大学セツルメントの日々を、保育実践の内容と機関誌『児童問題研究』の執筆記事の検討によって浮彫りにした。浦辺は東京帝国大学セツルメント託児所の保育実践と研究によって五つの概念モデルを形成した。すなわち、地域の共同と自律した保母によって運営される「新しい保育所」、教育的視点と実践研究で更新される「新しい保育」、母親及び同僚と対等に結び合う自律した保育者、「自己教育」と共同による啓蒙の装置としての「母の会」、育ち合いを主眼とする「集団保育」である。これら五つのモデルの構想を促したのは、抑圧者のいない自由な環境のもとで育まれた、保母との対等で民主的な人間関係であった。

第4章では、浦辺が天照園子供の家の「男保母」、東京市社会局の寺島方面館方面係、社会事業研究所所員という三つの職を経験し1943年5月に逮捕されるまでの、保育に対してより俯瞰的な視点を獲得した時期を取り扱った。天照園子供の家の保育実践において、浦辺は「集団保育」の有効性に確信を得た。しかしその反面、政府の政策の不十分さ、民間慈善事業の欺瞞、スラムでの地域共同は実現不可能であるという「新しい保育所」の限界性などの問題をつきつけられた。社会事業が孕む構造的問題を直感した浦辺は、保育問題研究会で中心的役割を果たす一方、社会事業研究所で全国規模の保育施設の現状を明らかにするため『本邦保育施設に関する調査』（1943年）に取り組んだ。浦辺は『調査』により、幼稚園と託児所の一元化の必要性、保育設備と保育内容の格差、保育施設の地域偏在、保母の専門知識と教養の貧困など、保育の抱える普遍的課題を浮彫りにし、さらに「戦時保育施設標準設定のために」（1942年）で施設と保育内容の規格化を提案した。戦前の名著『学齢前児童の諸問題』（1936年）に見られるオーエンの思想への傾倒と勤労女性の解放の主張、『本邦保育施設に関する調査』の提案する「新しい保育所」、すなわち保育所は「地域の生活文化の拠点」であるべきというアイディアは、戦後における課題意識の起点となった。

第II部は、終戦直後から浦辺が日本福祉大学を退職するまでの時期を対象とした。

第5章では終戦直後からの5年間の、民主保育連盟結成や総合生活研究所での調査、新しい家庭科教科書作りを検討し、この時期が戦後の浦辺の思想と行動の起点であることを示した。浦辺が結成に携わった「民主保育連盟」は、保母を労働者として捉える視点、研究による自己教育、保育所づくりを理念に含んでいる点で、1962年の「三位一体の保育運動」の構想の萌芽であった。羽仁説子とともに取り組んだ家庭科教科書では、生活への科学的視点の導入による家父長制からの脱却、女性の権利の保障の意識が明確に表れている。浦辺の女性の権利保障への捉え方は、戦前の女性の自覚と行動を前提としたものから、男性の意識変革による家族制度の民主化を基盤とするものへと深化した。

第6章では、国立身体障害者更生指導所の舎監としての実践が、戦前の二つの経験の応用と発展に特徴づけられていたことを明らかにした。心に傷を負った身体障害者同士、障害者と社会福祉の実践者、社会福祉の実践者同士という三つの民主的な関係は、東京帝国大学セツルメント託児所で探究された「新しい託児所」の三相の人間関係の応用であり、困難を抱えた当事者が生活の協力と学び合いによって自己の尊厳を回復し、自治と共同を叶える方法は、小学校教師以来の浦辺の共同のスタイルを発展させたものであった。

第7章では浦辺の「三位一体の保育運動」（1962年）の構想の基礎が、中部社会事業短大（後の日本福祉大学）赴任後の大学教育及び史的観点からの社会事業研究にあることを示した。福祉事業従事者は実践で把握した課題の改善のため、行政や政治に働きかけるとともに、国民全般への情報公開によって社会的な認知を広めるという「ソーシャルリフォーマー」の役割を持つ、とする見地は、浦辺に新たなビジョンを与え、1960年代前半の保育運動の理論的支柱の一つとなった。さらに、保育者養成課程の実習を通じた地域の農繁期保育所づくりの試みや、1959年の伊勢湾台風被災における全学あげての救援活動の先導など、大学教育の中で生まれた実践も、浦辺の「三位一体の保育運動」構想の理論的基盤となった。

第8章では、「三位一体の保育運動」を構成する三つの運動、すなわち保育研究運動、保母の労働運動、保育所づくり運動のうち、特に大きな要素である前者二つの詳細を、民主保育連盟（1946年～1952年）と東京、福島など各地で起こった1950年代の保母の労働運動との関連とともに明らかにした。

浦辺の「三位一体の保育運動」における保育研究運動とは、城戸幡太郎が「これからの保育研究運動の目標」（1962年）で提唱した「実践家と理論家との協力による実践行動」によって「現実の保育問題にたいするリアルな認識」を研ぎ澄ましていく営みに支えられていた。「三位一体」のうち、浦辺の主張する保育研究運動で重視されたのは、保育の歴史的・政治的な意味、経験主義の克服と創造性重視の幼児教育、制度と政策の研究及び保育者の労働条件、幼保一元化の遅滞による弊害、の四点である。三点めの示す通り、浦辺のいう保育研究運動は、保母の労働運動という要素を包含しており、民主保育連盟や東京保母の会など、保母による保育研究と労働運動が同一の場所で行われてきた、という歴史的経緯を踏まえたものであった。

1960年代に入ると、浦辺が支援する二つの集団で保育運動の光と影を象徴する出来事が起こった。光の側面は、私立園に勤務する若い保母たちを中心とした京都私立保育園保母労働組合の結成（1961年11月）であり、影の側面は、ヤジエ・セツルメントの廃園（1962年8月）と保母の解雇である。ヤジエ・セツルメントをめぐる出来事が地域の保育運動の限界を示す一方で、京都私立保育園保母労働組合の設立への動きは、労働運動の持つ可能性を示す出来事であった。同時期に起こった二つの出来事は、地域の保育運動の限界を、地域を超えて結び合う労働運動の力によって補完し乗り越えるという発想を生んだ。くわえて浦辺は各地の保育グループを保育研究のネットワークとして編成することを目指した。保母の労働運動と保育グループのネットワーク化という二つのアイディアから、「三位一体の保育運動」の構想が生まれた。

第Ⅲ部、第9章では、全国民間保育団体合同研究集会（「保育合研」）の第一回（1969年）から1980年代前半までを検討し、浦辺の示した「三位一体の保育運動」の保育史上の意義と



限界を浮き彫りにした。「三位一体の保育運動」は1970年代半ばまでは保持されたが1970年代後半から労働問題の分会の参加者数は減衰したばかりでなく、問題の取り扱いの難しさから分会は縮小し、1980年代半ばには「三位一体の保育運動」の影響は消失した。以降、「保育合研」を含めた保育運動は、研究運動を主としたものへと変容し、保育研究と保育者の労働運動は分断された。1970年代半ば、全国レベルでの保育運動では労働運動の影が薄れた一方、浦辺が保育所づくり運動の実践として創設したこぐま保育園とその周辺の永山地区では、保育研究運動、保育所の改善を目指す地域の運動、労働組合の運動が互いにエネルギーを補完しながら、創造的な保育と地域の共同の生成が行われた。こぐま保育園の事例は、地域と保育の接続に携わる人々が直接的に感じ取れる規模においては「三位一体の保育運動」が有効であることを示唆している。

### <終章>

終章では、序章で設定した三つの課題——社会変革への意識の変遷、生活の共有と学び合いによる民主的な人間関係の生成、浦辺が抱いた「新しい」保育者像の変容——に沿って本論を総括した。特に、一つめと二つめに関しては、小学校教師時代、東京帝国大学セツルメントおよび天照園で保育実践を行った時期、戦後から1970年代半ばまでを重点的に叙述し、くわえてそれぞれの時期について<思想的背景><研究><実践><生活>という四つの視点を軸にした概念図を示した。次に「三位一体の保育運動」の構造をモデル図として示し、保育所を中心とする地域の民主主義が生成するメカニズムを明らかにした。さらに三つめの「新しい」保育者像についても、図示した。

以下、上述の四つの視点から描いた概念図（要約では割愛）について述べる。

浅川小学校、潤徳小学校、五日市小学校の三つの教育実践は、農村の子どもたちを貧しさから救う、という立脚点は共通しているが、思想的背景はペスタロッチからマルクスへと徐々に変化する。また、小学校教師時代の同僚との共同生活による民主的な関係構築の経験は、1933年から翌年にかけての東京帝国大学セツルメント託児所における「母の会」の「おかず給食」と共同炊事、1935年から1936年の天照園子供の家の実践、社会事業研究所における共同炊事の研究（1942）、戦後の1950年から1955年の国立身体障害者更生指導所での実践、中部社会事業短大（日本福祉大学）における同僚性および共同炊事の研究へと継承され、1970年代には自ら創設した保育園の実践により、保育所を仲立ちとする地域の人々の生活の共同と民主主義、すなわち「新しい保育」として結晶化した。また、私的領域と実践の境界上で積み重ねられた共同生活によって、浦辺は「子どもが子どもを教育する」という集団保育に対する考えや、生活の協力と学び合いが共同を育むという「保育所は民主主義の学校」という信念に至った。この信念は、浦辺の抱く「新しい保母」すなわち創造的な保育者の姿とともに、浦辺の保育観を導いた。

東京帝国大学セツルメント託児所における保育実践では、小学校教師時代の新教育的実践で得た教材やグループ活動の知見、集団のなかで育ちあう子どもという理念、新興教育運動の挫折によって到達した「自己教育」を土台として、託児から保育への変革と、「母の会」の自主化

が進められた。無産者託児所の系譜に連なる東京帝国大学セツルメント託児所は、慈恵的な託児所を脱却し「新しい保育」を標榜していた。この「新しい保育」は、従来の幼稚園教育によらない生活指導と幼児教育の実践と、勤労婦人の権利の保障によって「未来の社会」を実現することを志向するものであった。浦辺は、東京帝国大学セツルメントで、「母の会」を保母主導から母親の自主的な組織へと導き、その活動が母親の社会的目覚めと「自己教育」の場となるよう発展させた。例会、「講習会」「お勉強会」による自己学習と、「母の会」と協同組合を通じた生活の共同によって、母親たちの関係は幾重にも結ばれ、共同の輪が周辺地域に広がった。「母の会」の成功は、浦辺に「自己教育」と生活の共同による地域の変革を確信させるに足るものであった。浦辺と保母たちの討議と研究、学びあいの上に展開された保育の特徴は、子どもの自主性や思考力の伸長に主眼をおいたグループ活動と、「自由と愉快」を基調とした保育者と子どもの対話、「様々な事を子供自身に解決させる」ことを目指した集団生活にある。これらは、戦後に浦辺が主張した「集団保育」及び「新しい保育」の考えの源流となった。

浦辺の東京帝国大学セツルメント託児所における実践の保育史上の意義は、すでに形成されつつあった「新しい保育」に、母親の「自己教育」と生活の共同による地域の向上と民主的関係の構築、グループ活動、保育者と子どもの対話による幼児教育、子ども自身による問題解決を重視した集団生活という、保育による社会変革の具体的条件を提示したことにある。

上記に対して、天照園子供の家における「男保母」としての保育実践は、「新しい保育」の可能性と限界性の両極を同時に認識する機会となった。保健的活動により、荒んだ環境におかれていたスラムの子どもたちは清潔観念と健康習慣を身に着けた。子どもが自らの生活を作り出す自治活動とプロジェクト活動は、社会性と自律性を引き出し浦辺の「新しい保育」はさらに深化した。一方、昼間から飲酒する親たちとの共同はほとんど不可能であり、また、周辺地域からの協力はスラムに対する偏見のために実現しなかった。天照園における実践は、困窮地帯においては「新しい保育」の社会変革の力が無効化されること、困窮地帯の根本的問題の解決には、社会事業政策の研究が必要であることを、浮き彫りにした。

天照園以降の浦辺の社会変革へのアプローチは、主として保育研究と社会事業研究で行われた。東京帝国大学セツルメント託児所と天照園の二つの実践を踏まえて執筆された『学齢前児童の諸問題』（1936年）におけるオーウェンに関する叙述からは、階級対立による革新から地域の共同へと、浦辺の変革の論拠が移行したことが読み取れる。その後、社会事業政策への課題意識の延長線上で取り組まれた『本邦保育施設に関する調査』（1943年）は、保育を取り巻く地域社会の課題と限界を詳細に明示し、戦後の保育運動に重要な視座を与えるものとなった。保育施設は「地域の生活文化の拠点」となるべきという浦辺の主張は、戦後、保育所が担うようになった地域の子育て支援の役割を予感させる、先駆的なアイデアであった。

終戦後、浦辺は、社会事業分野において戦前の旧体制が根本的には刷新されないことへの不信感から、草の根の民主主義の実現を希求した。戦後5年間に手掛けた民主保育連盟の結成への行動と、家計調査、労働調査、家庭科教育の研究、三つの子ども白書の作成によって、浦辺は女性及び子どもの権利の尊重が、家父長制を克服し民主主義を実現する基盤となるという認識を高めた。自ら設立した総合生活文化研究所において、天達忠雄とのエンゲルス研究で得た

知見も、その認識の裏づけとなった。

次の時期、国立身体障害者更生指導所の舎監として過ごした 1950 年からの五年間、浦辺は小学校教師時代の共同生活と東京帝国大学セツルメントの地域共同で身につけた自治と民主主義の手法を、障害者のケア・ワークの実践に適用した。自治と民主主義の手法とは生活の共同を出発点とした民主的関係の生成である。浦辺は舎監としての実践により、生活の共同がもたらす対等な関係を実証し学びの有効性を再認識した。学びは共同と自治において人々の結びつきを高める役割を果たすだけでなく、障害者の傷つけられた尊厳を回復させる機能をも持っていた。障害者のケア・ワークで得た学びに関する考えは、保育者養成教育や社会事業研究を經由して、1960 年代の「三位一体の保育運動」（1962 年）の保育研究の重視と、保母の労働運動や保育所づくり運動の当事者性への着目として生かされた。

中部社会事業短期大学に赴任（1955 年）して以降、浦辺は社会事業史研究によって、資本主義の発達段階と社会事業の発展の関係を認識し、戦後の社会事業における公的資金の重要性を主張した。さらに福祉事業従事者は実践で把握した課題の改善のため「ソーシャルリフォーマー」として社会運動を行う役割を持つとする考えは、1960 年代前半の保育運動の理論的支柱の一つとなった。社会事業研究にくわえて、この時期、浦辺が関係した二つの組織で起こった出来事も、「三位一体の保育運動」の構想に大きな影響を及ぼした。伊勢湾台風救援活動以降支援を続けてきたヤジエ・セツルメント保育所の廃園（1962 年 8 月）に至る前年からの動きと、京都私立保育園労働組合結成（1961 年 11 月）である。二つの出来事はそれぞれ、地域の共同の限界と労働運動の可能性を示すものであった。

浦辺が「三位一体の保育運動」（1962 年 4 月）によって各地に起こっていた保育グループを大きな潮流に合流させることを企図した理由は二つあり、一つは上記の地域で行われる保育運動の限界点の超克のためであり、一つは散発していた保育グループを官製ではない、草の根のネットワークとして編成し、保育運動が政策に影響を与え、社会変革を起こす力を持ち得ることであった。

1960 年代、浦辺は「三位一体の保育運動」を呼び掛ける一方、「集団保育」についての実践研究を進めている。この「集団保育」は「集団主義保育」とも混用されたが、本質的には「新しい保育」と同意であった。地域の共同と集団保育という「新しい保育」の二大テーマに、戦前と戦後を通して色濃く影響を及ぼしてきたものとしてオーウェンの思想がある。1963 年以降はさらに、クループスカヤの思想の影響がくわわった。小学校教師時代、浦辺はペスタロッチに傾倒したが、クループスカヤはペスタロッチの「人間の全能力の発達」とまだ目覚めていない子どもの「全精力の喚起」という教育理念を一部継承している。クループスカヤの、「学問的な思考の科学的な組み合わせ」を配慮することによって「生きた生活、事実の経験」が保障されるとする主張や、子どもが共同生活の集団的体験を喜びの情緒とともに積むべきであるという考えを、浦辺は「新しい保育」を普遍化するために援用した。

大学教育の次に取り組んだこぐま保育園（1972 年開園）においては、単独の園と地域住民、共通の要求を持つ園の連帯による地域の編み直し、保育者の労働運動と保育研究という「三位一体の保育運動」の最小モデルと、浦辺が戦前から積み上げてきた「新しい保育」の理論の具

現化が実現した。

次に「三位一体の保育運動」の構造を示したモデル図（要約では割愛）について記述する。保育所づくり運動の内容には、オーエンの思想の影響が色濃く表れている。さらに、保育所が子育て支援を超え、地域の文化の発信までを担う点において、浦辺が『本邦保育施設に関する調査』で示した「地域の生活文化の拠点」の構想が具現化しているといえる。また、戦後に浦辺が指摘した保育者の「ソーシャルリフォーマー」としての役割は、保育研究運動と保育者の労働運動が保育内容の研究、保育政策研究、労働問題の共有によって結び合い、研究で明確化された課題の解決に向け保育者が国、自治体に対するアクションを起こすことによって、果たされる。このアクションは、保育所づくり運動で関わる保護者と連帯して行なわれる。保育所づくり運動によって保護者や地域と深く関わりながら行われる保育は、創造的な実践例を示すことによって、保育研究運動に好影響をもたらし、保育研究運動は、事例分析によって多くの保育者、研究者と新しい保育を共有する。

さらに、浦辺のいう「新しい保育所」を運営する「新しい保母」のモデル図（要約では割愛）について記述する。浦辺は長い実践と研究生活のなかで「新しい」保育者モデルを五つ得た。一つめは東京帝国大学セツルメントなどの無産者託児所の「未来の社会」を求める自律した保母、二つめは保育問題研究会や社会事業研究所時代に出会った実践と研究の往還のなかで幼児教育を究める保母、三つめは焼け野原のなかで子どもを守るため連帯する民主保育連盟の保母、四つめは名前と顔を持ち地域の人々と共同するヤジエ・セツルメントの保母、五つめは劣悪な労働環境からの脱却を求めて運動する保母である。浦辺のいう「新しい保母」、創造的な保育者とは、五つすべての像が重なった共有部分に存在する。「新しい保母」によって運営される新しい保育所が、地域の共同と社会変革をかなえ子どもたちの「未来の社会」を実現する、と浦辺は信じていた。

浦辺の示した「三位一体の保育運動」の保育史上の意義は、「小異を超えて」結び合い運動を政策決定に影響を持ち得る勢力へと導く手法が具体的に提示されたこと、1960年代前半から1970年代半ばまでの保育運動の全国への波及に貢献したこと、労働運動が保育者の当事者意識を高めるだけでなく、実践や研究と分離できないものであることを示したことである。「新しい保育」を求める浦辺の道程は、保育者と保護者と地域の人々が共同し学び合う過程で実現する「新しい保育所」と自律的な市民（保育者と保護者）の保育運動によって、民主社会の実現を企図した社会変革者としての歩みであった。「保育所は民主主義の学校」という言葉は浦辺の求めた「新しい保育」を象徴している。社会変革の過程としての保育運動を永続させるため構想されたのが「保育研究運動」、「保育所づくり運動」、保育者の労働運動が「三位一体」となって互いにエネルギーを補完し大きな勢力を維持する「三位一体の保育運動」であった。

本研究の現代的意義は次の三点である。一点目は浦辺史の生涯にわたる保育運動への取り組みの検討を通して、保育者の労働環境と保育の質という現代保育の二大課題の解決への糸口は、保育者の労働運動にあると示したことである。二点目は、戦後の保育運動がたどった経緯の検討によって、保育研究における労働環境の研究、保育政策研究の重要性を明らかにしたことである。三点目は浦辺の「新しい保育」の探求の道筋を描出することによって、民主主義や共同

体を生成するという保育及び保育所の特徴を再発見したことである。

残された課題は三点ある。一つめは、浦辺の「三位一体の保育運動」の消失を招いた保育者の労働運動の停滞と減衰の直接的な理由を明らかに出来なかったことである。その探究には、戦後の公務員保育士の労働運動、多職種労働組合の動向の詳細な把握を必要とする。二つめは、浦辺が生涯を通じて社会変革を志向していた以上、政治的な意見や行動の検討が必要であるが、本研究では、保育と保育運動に関連する論文、行動のみを研究の対象としたために、政治に対する考えについて未検討である。三つめは、浦辺の社会福祉研究の包括的な検討である。本研究では、浦辺の保育研究や保育運動への考えに影響を及ぼした日本福祉大学時代における社会福祉論文のみを限定して取り扱ったため、社会福祉学の視点から浦辺の保育思想を捉えることは、今後の課題として残されている。

## ●初出一覧

「浦辺史が目指した学び①～教師時代の共同生活が与えた影響を中心に～」

『学習院大学 教育学・教育実践論叢』第8号、2020年3月

「浦辺史の戦後五年間の歩み～保育運動と家庭科教育を通じた民主主義の模索と苦闘～」

『日本女子大学大学院紀要 家政学研究科・人間学研究科』第27号 2021年3月

「浦辺史と『児童問題研究』－11本の執筆記事の検討を通して－」

『保育者養成教育研究』第5号、2021年3月

「浦辺史と障がい者の自治と共同 ―国立身体障害者 更生指導所における1950年代前半の取り組み―」

『秋草学園短期大学紀要』第37号、2021年3月

## ●参考文献

### ◆浦辺史

<手記>

R・X「左傾学生生徒の手記 七一」『左傾学生生徒の手記第二輯』文部省思想局、1934年3月

浦辺史「スラムの子どもと生活して ―日記のうちから―」児童の村生活教育研究会 編『生活学校』1936年5月号・8月号・10月号

浦辺史「社会的目ざめ即失業」国分一太郎 編『石をもて追われるごとく』英宝社、1956年11月

浦辺史「川田由太郎と新興教育運動」井野川潔・森谷清・柿沼肇 編『嵐の中の教育』新日本出版社、1971年12月

浦辺史「行為なきを罰す―「保育問題研究会」活動への弾圧―」大槻健・寒川道夫・井野川潔 編『いばらの道をふみこえて』民衆社、1976年8月、186-195頁

浦辺史「ゴム長と私」鉄道弘済会編『明るいまち』243号、1979年8月、12頁

浦辺史「私のみた戦争と保育事業」『社会事業研究』第6号、1978年11月

浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』草土文化、1982年5月  
浦辺史・浦辺竹代『轍 福祉の道をあゆむ』草土文化、1984年10月  
浦辺史先生米寿記念誌刊行委員会『昭和史を共に生きて』、1993年6月  
浦辺史・浦辺竹代『福祉の昭和史を生きて』草土文化、1994年6月  
浦辺史「絶筆 二一世紀に伝えたい二〇世紀保育運動の軌跡 保育運動の回顧・点描（竹代の旅の見送りの中で）」浦辺史先生をしのぶ会『子どもは未来』全国保育団体連絡会、2002年12月（筆者所蔵）

#### <対談、証言>

浦辺史・増淵穰・菅忠道・塩谷アイ・小田真一 他「子どものいのちと発達をまもる保育運動 —浦辺さんを囲んで治安維持法下の活動をきく」『季刊教育運動研究』創刊号、1976年7月、132-171頁  
岩代輝明・上田唯郎・浦辺史・小田真一「治安維持法下の教育労働運動」山口近治『治安維持法下の教育労働運動』新樹出版、1977年12月、207-251頁  
吉田久一・一番ヶ瀬康子「戦中から戦後へ —塚本哲、浦辺史、積惟勝氏に聞く」『昭和・社会事業史への提言』ドメス出版、1982年10月  
浦辺史・重田信一・五味百合子（座談会）「戦時下の社会事業と社会事業研究所の活動 —天達忠雄氏を偲びつつ—」『日本福祉大学研究紀要』第69号、1986年10月  
浦辺史・小笠原裕次・中村宗信「座談会 日本福祉大学社会福祉学会の歩みをふりかえって」日本福祉大学社会福祉学会編『福祉研究』34号、1976年5月、111-130頁  
高島進、宍戸健夫、池本美和子編「大先輩からの助言 浦辺先生 第一回」2000年7月、日本福祉大学図書館所蔵  
松本園子「浦辺証言」『昭和戦中期の保育問題研究会 保育者と研究者の共同の軌跡』新読書社、2003年8月  
松本園子「浦辺証言」『証言・戦後改革期の保育運動 民主保育連盟の時代』新読書社、2013年5月

#### <論考>

浦辺史「東京の同志諸君に訴ふ」『新興教育』1931年8月号、56頁  
川村守三（浦辺史）「残された俺たち」『新興教育』第2巻第9号、1931年11月、24-25頁  
川田吉太郎（浦辺史）「何故浮び上るか」『新興教育』第2巻第8号、1931年9月・10月、45-46頁  
川田吉太郎（浦辺史）「学校自治会の自主化」『新興教育』1931年12月号、58-63頁、  
大野健一（浦辺史）「二いろの先生」『ピオニール・トクホン』第一輯、1932年2月、6-52号  
川田由太郎（浦辺史）「教育サークルと新興教育同盟」『新興教育』1932年3月号、70-75頁  
児童読物研究部（浦辺史）「現行月刊絵本の研究」『児童問題研究』第1巻1号、1933年7月、34-39頁

- 児童読物研究部(浦辺史)「生活と子供」(「現行月刊絵本の研究」の付記)『児童問題研究』1933年7月号、39頁
- XYZ(浦辺史)「新学校参観記<自由学園の巻>」『児童問題研究』第1巻第1号、1933年7月、79-81頁
- 署名なし(浦辺史)「児童問題研究手引 ー林間学校のための諸文献ー」『児童問題研究』第1巻1号、1933年7月、82-84頁
- 託児所研究部(浦辺史)「朝のおならびについて」『児童問題研究』第1巻第2号、1933年8月、24-27頁
- 田中・眞勢(浦辺史)「新学校参観記(明星学園の巻)」『児童問題研究』第1巻第2号、1933年8月、88-90頁
- 児童読物研究部(浦辺史)「読書クラブの作り方」『児童問題研究』第1巻第4号、1933年10月号、30-35頁
- 眞勢・田中(浦辺史)「新学校参観記(玉川学園の巻)」『児童問題研究』第1巻第4号、1933年10月号、50-53頁
- 保育研究部(浦辺史)「母の会の組織と活動について」『児童学研究』第1巻第5号、1933年11月12月号、25-30頁
- 田中卓「鐘ヶ淵子どもの家を訪ねて」『児童問題研究』第2巻第2号、1934年2月号、42-44頁
- 保育研究部「農繁期保育所の問題」『児童問題研究』1934年7月号、31-39頁
- 南きんじ(浦辺史)「多摩川キャンプにおける子どもの自然・社会研究プログラム」『児童問題研究』1934年8月号、17-24頁
- 浦辺史「保育問題研究のために ー読書案内」『教育』第7巻第2号、1939年2月、294-299頁
- 浦辺史『学齡前児童の諸問題 現代教育機構解説選書(4)』扶桑閣、1936年5月
- 保育問題研究会第七部会(浦辺史・阿部和子)「両親教育に関する研究 第一部 母の会に関する調査 第二部母親に関する調査」『保育問題研究』第4巻第2号、1940年2月、1-30頁
- 浦辺史「共同作業農繁託児所共同炊事実施に伴う農村労働事情調査成績」『社会事業』第24巻第7号、1940年7月
- 浦辺史「新体制に寄す」『保育問題研究』1940年8月号、2頁
- 浦辺史「保育所令制定要望運動の顛末」『保育問題研究』第5巻3号、1941年3月、6-11頁、7-8頁
- 浦辺史「農繁期託児所の問題」『新児童文化』3号、1941年7月、359-369頁
- 浦辺史「隣組保育の指導」『教育』第10巻第1号、1942年1月、76-78頁
- 浦辺史「二三の新刊保育書に就て」『厚生問題』第26巻第3号、1942年3月、69-75頁
- 浦辺史「農村婦人の生活技術指導の拠点」『教育』10巻6号、1942年6月、43-49頁
- 浦辺史「保育施設の地域性について」『国民保育のために』1942年8月、40頁
- 浦辺史「戦時保育施設標準設定のために」『厚生問題』26巻10号、1942年10月、25-50頁

浦辺史「労働組合と保育施設」『民主保育ニュース』No7、1947年12月、松本園子『民主保育連盟資料』六花出版、2015年4月

浦辺史「家庭科教科書の新しい構想」『あかるい教育』49号、1949年4月、19-25頁

総合生活文化研究所（浦辺史）「子ども白書」『赤旗』1949年5月6日2面、7日2面、8日2面

浦辺史「婦人労働の現状について ―既婚婦人を中心として」『労働の科学』1949年8月号、12-21頁

浦辺史「中学家庭科教科書の検討」『教育』3巻12号、1949年12月、42-49頁

浦辺史「保育園と幼稚園」羽仁説子 編『新しい保育園の運営』博文社、1955年3月、26-43頁

浦辺史「働き手の問題」羽仁説子 編『新しい保育園の運営』博文社、1955年3月、90-106頁

浦辺史・松田密玄「保育園の附帯事業」羽仁説子 編『新しい保育園の運営』博文社、1955年3月、154-163頁

和田博夫・浦辺史『からだの不自由な子ども 肢体不自由児の治療と教育』新評論社、1955年11月

浦辺史「児童・少年保護立法の発達」『家族問題と家族法講座』酒井書店、1957年、319-380頁

浦辺史「児童問題をめぐる運動」小川太郎 他 編『明治図書講座学校教育 日本教育の遺産』明治図書、1957年5月、157-232頁

浦辺史「国民の保育要求をみたす途」『保育の友』第5巻第5号、全国社会福祉協議会、1957年5月、12-13頁

浦辺史「社会福祉活動と国民の協力」山口県社会福祉協会社会福祉研究所『山口県社会福祉』1957年9月、2-8頁

浦辺史「第三回日本母親大会に参加して」日本福祉大学人間関係研究所『中部社会事業』第6号、1957年10月、2-7頁

浦辺史「社会事業職員の問題」『社会事業』第40巻第12号、1957年12月、34-39頁

浦辺史「国民教育と幼児教育施設」『教育』84号、1958年2月、19-30頁

浦辺史「保母の就職的地位の確立について」『婦人と年少者』4号、1959年4月、2-4頁

U（浦辺）「災害救助臨時保育所」日本福祉大学災害対策本部（教授会組合、学生自治会）『救援速報 NO.4』1959年10月4日

浦辺史「第一章現代社会と社会事業」『社会事業要論』ミネルヴァ書房、1959年5月

浦辺史「伊勢湾台風と社会福祉」『社会事業』42（12）、1959年12月、2-10頁

浦辺史「新しい保育所の系譜」『日本教育運動史 第三巻 戦時下の教育運動』三一書房、1960年12月

浦辺史「工業都市四日市市における社会福祉事業のすすめ方」『四日市市社会福祉事業史』四日市市社会福祉協議会、1960年2月 293-302頁

浦辺史「社会事業職員論」日本福祉大学附属人間関係研究所『福祉研究』10号、1961年12



月、2-7 頁

浦辺史「幼児の保育環境」『現代教育学 15 子どもの生活と道徳』岩波書店、1961 年 10 月

浦辺史「三位一体の保育運動」(月刊)『保育問題研究』79 号、1962 年 4 月、巻頭言

浦辺史「幼児教育の新しい研究はなぜ必要か」名古屋保育問題研究会『あしたの子ども』No.22 特別号、1962 年 6 月、1 頁

浦辺史・真田是・森田庸三郎・宍戸健夫・土方康夫「組織化のプロセスからみた地区組織活動」保健福祉地区組織育成 編、1962 年(浦辺執筆箇所は「B 農繁期共同炊事の場合」である。日本福祉大学図書館所蔵)

浦辺史「保育運動からみた「レンガの子ども」」名古屋保育問題研究会編『レンガの子ども』1963 年 1 月、1-8 頁

浦辺史『日本の保育問題』ミネルヴァ書房、1963 年 12 月

浦辺史「社会事業の意義」『社会福祉事業概説』ミネルヴァ書房、1964 年 5 月、55-64 頁

浦辺史「身体障害者福祉と社会連帯性」『週刊社会保障』19 卷 334 号、法研、1965 年 11 月、12-14 頁

浦辺史「社会福祉職員の間像 —社会福祉に働くものの論理と倫理(第 4 回社会福祉研究集会・記念講演)」日本福祉大学社会福祉学会編『福祉研究』18 号、1967 年 3 月、24 - 33 頁

浦辺史「社会福祉労働者の課題」日本社会福祉学会編『季刊福祉問題研究』創刊号、1969 年 2 月、8-12 頁

浦辺史『日本保育運動小史』風媒社、1969 年 5 月、30 頁

浦辺史「社会福祉大学教育の反省」淑徳短期大学学報第 1 号、1971 年 3 月、134-136 頁

浦辺史・益子義教『ソ連の社会保障 医療制度』日ソ協会、1972 年 2 月

浦辺史「保母養成体制の問題点」小川太郎・浦辺史・小川正亮編『福祉・障害者・大学 障害者の教育権と社会福祉研究・教育体制』ミネルヴァ書房、1975 年 7 月、60-83 頁

浦辺史「本学を去るにあたって」『日本福祉大学研究紀要』第 28 号、1976 年 3 月、140-141 頁

浦辺史『子どもは未来』ミネルヴァ書房、1980 年 8 月

浦辺史「占領下の民主保育連盟で」『塩谷アイと保育運動』さ・さ・ら書房、1980 年 8 月、20-23 頁

浦辺史・宍戸健夫・村山祐一編『保育の歴史』青木書店、1981 年 4 月

浦辺史「保育所の危機と保育運動の主体形成」保育団体連絡会編『戦後の保育運動』草土文化、1988 年 8 月、135-142 頁

浦辺史「全国民間保育所連絡協議会のこと」保育団体連絡会編『戦後の保育運動』草土文化、1988 年 8 月、120-128 頁

浦辺史「第二期」保育問題研究会の発足」保育団体連絡会編『戦後の保育運動』草土文化、1988 年 8 月

浦辺史・浦辺竹代『道づれ 新しい保育を求めて』草土文化、1982 年 5 月

浦辺史・増渕穰・菅忠道・塩谷アイ・小田真一 他「子どものいのちと発達をまもる保育運動  
—浦辺さんを囲んで治安維持法下の活動をきく」『季刊教育運動研究』創刊号、1976年7  
月、132-171頁

◆一次資料 【機関誌・新聞・公文書】

<戦前>

成城小学校教育問題研究会『教育問題研究』1925年7月(64号)～1928年2月(95号)  
東京帝国大学セツルメント『東京帝国大学セツルメント十二年史』1937年2月  
新興教育研究所『新興教育』1930年9月号～1932年11月・12月号  
新興教育研究所『ピオニールトクホン第一輯』1932年2月  
万国婦人子供博覧会事務所『万国婦人子供博覧会報告』1935年  
児童問題研究会『児童問題研究』1933年7月～1935年3月(全15号)  
日本社会事業研究会「日本社会事業新体制要綱 国民厚生事業大綱」常盤書房、1940年9月  
社会事業研究所「現下我國社会事業の帰趨」1940年10月  
社会事業研究所「現下我國社会事業の帰趨」1940年10月  
社会事業研究所・愛育研究所編著『本邦保育施設に関する調査』社会事業研究所、1943年3  
月  
社会事業研究所「東北地方における農繁期生活共同施設の現状」『厚生問題』1943年3月号  
(53-79頁)、4月号(27-54頁)

<戦後>

アジア婦人会議参加実行委員会『日本の婦人と子供』日本民主婦人協議会、1949年12月  
全日本産業別労働組合会議『児童の生活は守られているか —児童白書—』1949年5月5日  
関西保育問題研究会『関西保育問題研究』19号、1962年7月  
日本母親連絡会10年史編纂委員会「年表」『母親運動10年のあゆみ』、1966年8月  
全国私立保育園連盟編『私保連運動の推移とその集積 —全国私立保育園研究集会報告集—(第  
1回より第8回まで)』、1965年、18頁(日本社会事業大学図書館所蔵)  
『保育問題研究』(月報)1954年2月(1号)～1965年4月(115号)  
『季刊保育問題研究』1962年6月(1号)～1986年7月(100号)  
アジア婦人会議参加実行委員会『日本の婦人と子供』日本民主婦人協議会、1949年12月  
日本福祉大学災害対策本部報道班「救援速報」NO1～14(1959年10月3日～10日)  
『日本福祉大学50年誌』編集委員会『日本福祉大学50年誌』日本福祉大学、2003年10月  
短大35周年記念誌委員会『短大35年のあゆみ 日本福祉大学女子短期大学部』日本福祉大学  
女子短期大学部、1996年3月  
枳中共同保育所『いきいきとした子どもをめざして 枳中共同保育所の記録』、1968年10月  
日本学術会議「社会福祉の研究・教育体制について」総学庶第745号昭和49年5月20日  
日本母親連絡会10年史編纂委員会『母親運動10年のあゆみ』、1966年  
全国保育団体合同研究集会実行委員会『全国保育団体合同研究集会 要綱』1969年から1990

年まで（第1回～第3回までは『全国民間保育団体合同研究集会 要綱』の名称）  
全国保育団体合同研究集会実行委員会『全国保育団体合同研究集会 報告集』1969年から1990  
年まで（第1回～第3回までは『全国民間保育団体合同研究集会 報告集』の名称）  
全国民間保育団体合同研究会 全国実行委員会基調報告案作成小委員会『国民の保育要求の実現  
をめざして』1969年5月  
全国保育団体合同研究集会実行委員会『子どもの生活と権利を守って ―保育合同研10年の  
あゆみ―』1978年  
京都の民主運動史を語る会「私保労結成前後―ひらのりょうこさんに聞く―（上）（下）」『燎  
原』第173号及び175号、2007-2008年、2-3頁（173号）、6-7頁（175号）

#### ◆公文書

東京府学務部社会課『無料宿泊所止宿者に関する調査―浮浪者に関する調査資料―』1931年4  
月  
文部省学生部『プロレタリア教育運動』1933年4月  
文部省学生部『プロレタリア教育の教材』1934年3月  
文部省『左傾学生生徒の手記』第二輯』1934年3月  
文部省『新教育指針』1947年1月  
文部省児童文化委員会『児童問題の現状に対する所見 ―子どもの幸福は守られているか』1949  
年5月3日  
東京府社会局『東京市新市域不良住宅地区調査①』1936年3月  
東京市社会局『紙屑拾ひ（バタヤ）調査 』1935年7月  
「第二部政府公共部門の計画 第三章人的能力の向上と科学技術の振興」『国民所得倍增計画』  
1960.12.27.閣議決定  
文部省児童文化委員会『児童問題の現状に対する所見 ―子どもの幸福は守られているか』1949  
年5月3日  
中央教育審議会「後期中等教育の拡充整備について（第20回答申）」昭和41年10月31日  
中央児童福祉審議会「保育所における幼児教育のあり方について」昭和46年10月6日  
中央児童福祉審議会保育制度特別部会「保育問題をこう考える―中間報告―」昭和38年7月  
文部省初等中等教育局長、厚生省児童局長「幼稚園および保育所の調整についての文部省、厚  
生省間の了解事項について」（通知）昭和38年10月28日  
中央教育審議会「今後における学校教育の総合的な拡充整備のための基本的施策について」（答  
申）昭和46年6月11日

#### ◆新聞記事

朝日新聞「小学生盟休 先生が十七名乱打して」1929年11月14日、東京夕刊、2頁  
朝日新聞「児童二百名が同盟休校 深刻な埼玉の小作争議 消防も総辞職す」1929年12月7  
日、東京朝刊、7頁

朝日新聞「小学生の盟休騒ぎ 裏面に町長排斥問題か」1929年2月5日、東京夕刊、2頁  
毎日新聞「先生の転任を嘆き小学生等同盟休校 —『先生を返せ』と校長に迫り」1929年9月8日、東京夕刊、2頁  
朝日新聞「受持ち児童に左傾思想を注入 五日市の浦邊言訓導」東京朝刊、1931年6月5日  
朝日新聞「左傾運動嫌疑で教員検挙さる 五日市小学校の訓導」東京夕刊、1931年6月5日  
読売新聞「児童赤化の陰謀に暑休の校外催し厳禁 全国の左翼教員に検挙の手配」東京朝刊、1931年6月15日 7頁  
共産党調査部「子ども白書」『赤旗』1949年5月6日2面、7日2面、8日2面  
朝日新聞 1962.11.14 夕刊「想林 人づくりは幼児から」記事  
朝日新聞「児童福祉白書の内容」1963年5月5日東京朝刊2頁

#### ◆ホームページ

日本保育学会 HP [http://jsrec.or.jp/?page\\_id=147](http://jsrec.or.jp/?page_id=147) 2019.11.21 確認

#### ◆先行研究・関連論文・関連資料

青木香保里「浦辺史論文から学ぶ家庭科の総合性：生活の共同化を基幹とする生活設計をめざす家庭科の構想」『教授学の探究』23巻、2006年1月、123-153頁  
秋田喜代美監修『保育学用語辞典』中央法規、2019年12月  
浅井幸子「東京保育問題研究会における「伝えあい保育」の成立と展開」『東京大学大学院教育学研究科紀要』57巻、2017年  
浅井 純二「伊勢湾台風における保育の救援活動に関する考察：ヤジエセツルメント保育所を中心に」56巻2号、2015年8月、13-25頁  
浅野俊和「保育運動家浦辺史の歩み—ペスタロッチへの憧れを原点として—」『日本ペスタロッチ・フレーベル学会紀要』第9号、1993年3月、47-63頁  
浅野俊和「1930年代前半保育運動における「母親指導」」『名古屋大学教育学部紀要』1993年、143-153頁  
浅野俊和「1930年代前半保育運動における『集団的訓練』」『名古屋大学教育学部紀要（教育学科）』42巻1号1995年、143-161頁  
浅野俊和「戦時下保育運動に見る＜抵抗＞と＜挫折＞ —浦辺史の保育運動を中心に—」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要』15号、2014年、1-10頁  
浅野俊和「戦後日本の「保育運動史」—その研究の意義と課題—」『日本幼児教育史研究』8巻、2013年、19-32頁  
天野章『つたえあい保育の展開』文化書房博文社、1972年5月  
天野正子『つきあいの戦後史—サークル・ネットワークの拓く地平』吉川弘文館、2005年4月  
石月静子「女性教員の要求と運動 —一九五〇年代前半・全国婦人教員研究協議会を中心に—」

- 広川禎秀・山田敬男 編『戦後社会運動史論 —1950年代を中心に—』大月書店、2006年1月、212-234頁
- 石月静恵「一九六〇年代の保育問題研究活動」広川禎秀・山田敬男 編『戦後社会運動史論② —高度成長期を中心に—』大月書店、2012年3月、239-266頁
- 石月静恵「保育問題研究会の成立と活動 —名古屋を中心に—」『桜花学園大学人文学部研究紀要』第14号、2012年、1-16頁
- 磯村英一「大正デモクラシーと社会局調査」『東京市社会局調査報告書[別冊]』SBB 出版会、1995年1月、31-50頁
- 一番ヶ瀬康子「保育運動前進の願い」『保育問題研究』（月報）62号、1960年11月号
- 一番ヶ瀬康子・泉順・小川信子・宍戸健夫『日本の保育』医歯薬出版、1962年3月
- 伊藤久美「保育者の成長過程：高瀬慶子のライフヒストリー研究（1）（2）」『見延山大学仏教学部紀要』10号
- 伊藤文人「高島進教授の社会福祉研究の歩み」『日本福祉大学社会福祉論集』第110号、日本福祉大学福祉社会開発研究所、2004年2月1-33頁
- 伊藤文人「『社会福祉発達史』研究の射程と展望（その1）—高島進の研究を中心に—」『日本福祉大学社会福祉論集』143・144号、2021年3月、57-70頁
- 伊藤亮子編・著（協力 東京・こぐま保育園）『3-4-5歳児の保育計画』草土文化、1995年8月
- 井野川潔・森谷清・柿沼肇 編『嵐の中の教育』新日本出版社、1971年12月
- 井野川潔「編者のことば」池田種生『プロレタリア教育の足跡』新樹出版、1971年8月、478-482頁
- 井野川潔「〈入門講座〉運動史解説②「新教」の教育運動」『新興教育復刻版月報』No.2、白石書店、1975年5月、4-10頁
- イリイチ、イヴァン／玉野井芳郎・栗原彬訳『シャドウ・ワーク——生活のあり方を問う』岩波書店、1982年9月（Ivan Illich, *Shadow work*, University of Cape Town, 1980）
- エドワーズ、キャロリン／ガンディーニ、レラ／フォアマン、フォアマン編／佐藤学・森眞理・塚田美紀訳『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房、2001年6月
- 大江健三郎「敗戦経験と状況71」『鯨の死滅する日』文芸春秋、1972年、110-116頁
- 大橋精夫「わが国における集団主義思想の展開」小川太郎編『集団主義教育の基礎理論』明治図書、1967年2月
- 岡田正章・久保いと・阪元彦太郎・宍戸健夫・鈴木政次郎・森上史郎編纂『戦後保育史』第一巻・第二巻、フレーベル館、1980年11月
- 岡野正「日本教員組合運動史研究--1920年代の動向-1-」『北海道大学教育学部紀要』第18号、1971年3月、53-77頁
- 岡野正「日本教育運動史研究：1930年代の動向」『北海道大学教育学部紀要』1973年11月、第22号、123-173頁
- 阿部和子『子どもたちを主人公に親たちと歩いてきた道』阿部和子遺稿・追悼集刊行委員会 編、

1991年11月

天達忠雄・酒寄敏雄編『日本の労働者』東京大学出版会、1953年11月（浦辺史も執筆に参加）

池田種生「嵐の跡を訪づれて」『動きゆく社会と教育の展望』現代教育社、1932年7月、296-309  
頁（初出は杉田庄三（池田のペンネーム）『教育時論』1929年10月号）

野上荘吉（池田種生）『日本教育界暴露記』自由社、1930年11月

池田種生『動きゆく社会と教育の展望』現代教育社、1932年6月

池田種生『プロレタリア教育』の足跡』新樹出版、1971年8月

岩尾裕純「まえがき」小川太郎・浦辺史・小川正亮『福祉・障害者・大学』ミネルヴァ書房、  
1975年7月

後房雄「公的保障と集团的自助のダイナミズム・保育所づくり運動の展開を手がかりとして」  
『年報政治学』39巻、1988年

海卓子『幼児の生活と教育』フレーベル館、1965年12月

宇佐美承「ここに生きる・63 ぶんなぐり保母」『朝日ジャーナル』1961年3月19日号、62-67  
頁

宇治川義雄「浦辺先生の思い出」前掲、「浦辺史先生米寿記念誌」刊行準備会『昭和史を共に生  
きて』48-49頁

宇野重規『民主主義とは何か』講談社現代新書、2020年10月

江口渙「教育労働者の組合結成」『中央公論』第45巻第8号、1930年8月、99-104頁

原田嘉美子（旧姓及川）・難波ふじ江「“ぶんなぐり保母”卒業」『朝日ジャーナル』1962年4  
月22日号、38-41頁

及川嘉美子、難波ふじ江『レンガの子ども ぶんなぐり保母の記録』光風社、1962年11月

原田（及川）嘉美子・河本（難波）ふじ江・解説 土方康夫『さ・さ・ら版 レンガの子ども』  
さ・さ・ら書房、1974年6月

オーエン、ロバート／本位田祥男・五島茂訳『ロバート・オウエン自叙伝』日本評論社、1927  
年12月

オーエン、ロバート原著／長田新監修『幼児教育の新研究』、日東書院、1925年4月

大河内一男『日本資本主義と労働問題』白日書院、1946年1月

大河内一男「社会問題」『社会科文庫選集 16 社会文化編』三省堂、1954年、1 - 81頁

大河内一男「「婦人労働」覚え書き ―何故、男子労働問題がなく「婦人労働問題」だけがあ  
るのか、について―」『婦人労働』弘文堂、1957年5月、293-301頁

小川太郎「集団主義教育の本質」『講座集団主義教育』一卷、明治図書、1967年2月、198-219  
頁

小川信子「ケース・スタディ／3 風の子保育園」『建築知識』17巻10号、1975年10月、107-114  
頁、108頁

小川信子『子どもの生活と保育施設』彰国社、2004年

奥野正太郎「精神薄弱児の教育並み保護」『教育問題研究』第83号、1927年2月、51-55頁

- 小倉襄二「組合づくりの条件 —京都私立保育園保母労働組合について—」『季刊保育問題研究』第1号、1962年6月、21-29頁
- 垣内国光・浦辺史「臨調行政改革と保育見直し論 —三浦文夫氏の所説に寄せて—」、『社会福祉学』24巻1号、日本福祉学会、1983年6月、87-116頁
- 垣内国光編『日本の保育労働者』ひとなる書房、2015年7月
- 垣内国光「風雪に耐えて 法人創設者浦辺史」『多摩福祉会50年誌』社会福祉法人多摩福祉会50年誌編集委員会編、2022年、10-17頁
- 加賀秀雄「キャンプセミナーの歴史と日本福祉大学」『日本福祉大学50年誌』編集委員会『日本福祉大学50年誌』日本福祉大学、2003年10月、48-49頁
- 柿沼肇『新興教育運動の研究』ミネルヴァ書房、1981年12月
- 柿沼肇「浦辺史とその教員時代 —ペスタロッチへの傾倒から『教育労働者』へ」『日本福祉大学社会福祉論集』112号、2005年2月、1-23頁
- 柿沼肇「浦辺史と新興教育運動 —子ども・教員の解放と社会の変革をめざして—」『日本福祉大学社会福祉論集』第114号、2006年3月、1-32頁
- 金本定夫「職業としての保母 なぜ保母の組織はのびないか」『保育の友』7(11)、1959年11月、9-12頁
- 河上肇『貧乏物語』岩波書店、1947年9月
- 河村定治「全国社会福祉協議会保母会結成側面史」植山つる・浦辺史・岡田正章 編『戦後保育所の歴史』全国社会福祉協議会、1978年2月
- 菅忠道「東大セツル児童部と労農少年団の思い出」井野川潔・森谷清・柿沼肇 編『嵐の中の教育』新日本出版社、1971年12月
- 久保義三『昭和教育史 天皇制と教育の史的展開 上・下』三一書房、1994年10月
- 小林美希「保育園株式会社：職業としての保育2(第3回)流出する委託費の行方」『世界』926号、2019年11月、68-7頁
- 小林美希「保育園株式会社 職業としての保育2(第6回)規制緩和が保育にもたらしたもの」『世界』930号、2020年3月、154-163頁
- 黒川泰男「浦辺史先生を思う」前掲、「浦辺史先生米寿記念誌」刊行準備会『昭和史を共に生きて』64-65頁
- 国分一太郎「『生活綴方』の運動と『生活学校』の運動」教育科学研究所 編『教育』、1952年3月号、18~27頁
- 駒林邦夫「プロレタリア教育運動」小川太郎・海後勝雄・駒田守一・国分一太郎他 編『学校教育2 日本教育の遺産』明治図書、1957年5月、125-154頁
- 関西保育問題研究会「19日は比叡山へ!!」『関西保育問題研究』19号、1962年7月、2頁
- 城戸幡太郎「フレーベルとオーウェン」『保育問題研究』第1巻第2号、1937年11月
- 城戸幡太郎「保母は子供に何を求むべきか」『保育問題研究』第2巻第2・3号合併号、1938年3月
- 城戸幡太郎「保育問題は発展したか」『保育問題研究』(月刊) No.1、1954年2月、1頁

- 城戸幡太郎・鈴木とく・宍戸健夫「座談会 暗い谷間の頃の保母と子どもと研究者」『保育の友』  
第7巻第5号、1959年5月、14-21頁
- 城戸幡太郎「これからの保育研究運動の目標」『季刊保育問題研究』1巻1号、1962年6月、  
2-3頁
- 木下龍太郎・多田泰子・乾孝・藤井敏彦・小川信子・横田昌子「シンポジウム 集団主義保育  
とは何か」『季刊保育問題研究』47号、1974年5月、1-18頁および102頁
- 京都私立保育所労働組合「はじめての私立保育所労組」全国保育団体連絡会 編『戦後の保育運  
動』、1988年7月
- 久世妙子「浦辺先生の思い出」前掲、「浦辺史先生米寿記念誌」刊行準備会『昭和史を共に生き  
て』60-61頁
- クループスカヤ、ナデジダ／勝田昌二訳『国民教育と民主主義』岩波書店、1954年10月
- クロポトキン、ピョートル「青年に訴う」／大杉栄訳『大杉栄・伊藤野枝選集第1巻 クロポ  
トキン研究』黒色戦線社、1986年6月
- 郷地二三子「月刊誌『保育の友』の創刊」植山つる・浦辺史・岡田正章 編『戦後保育所の歴史』  
全国社会福祉協議会、1978年2月、75-80頁
- 小室泰治「浦辺史における保育と保育運動」『草の根福祉』44巻、2014年、35-44頁
- コロнтаイ、アレクサンドラ／尾瀬敬止訳『母性と社会』、ロゴス書院、1931年10月
- 近藤礼子『歩け 礼子よ！ 重度身障児として生きて』草土文化、1968年5月
- 近藤礼子『笑って！礼子 太陽に向かって生きる』エフエー出版、1990年11月
- 斎藤勇「イメージ」前掲、「浦辺史先生米寿記念誌」刊行準備会『昭和史を共に生きて』71頁
- 佐藤隆「〈平和と民主主義のシンボル〉から〈学歴正当化装置〉としての学校へ」大門正克・大  
槻奈巳・岡田知弘・佐藤隆・進藤兵・高岡裕之・柳沢遊 編『高度成長の時代1 復興と離  
陸』大月書店、2010年10月
- 佐藤洋「昭和八年頃」東京帝国大学セツルメント『東京帝国大学セツルメント十二年史』1937  
年2月、274頁
- 佐藤学「城戸幡太郎の教育科学論」乾孝・佐藤学・宍戸健夫・内島貞雄・太田素子『城戸幡太  
郎と現代の保育研究』ささら書房、1984年11月、197頁
- 佐藤学「公共圏の政治学—両大戦間のデューイー—」『思想』907号、2000年1月、18-40頁
- 塩谷アイ「東北地方における農繁期生活共同施設の現状」『厚生問題』1943年3月号、4月号
- 宍戸健夫「〈特報〉伊勢湾台風による被災地の保育活動ルポ」日本社会福祉協議会『保育の友』  
7巻11号、1959年11月、23-27頁
- 宍戸健夫「子どもたちは守られたか 伊勢湾台風と名古屋市における臨時保育活動」『社会事業』  
42巻12号、1959年12月、20-31頁
- 宍戸健夫「伊勢湾台風と子ども」教育科学研究会編『教育』第10巻5号、1960年5月、82-88  
頁
- 宍戸健夫「若い保育者のために—解説にかえて」浦辺史『日本保育運動小史』風媒社、1969  
年5月、4-5



- 宍戸健夫「解説 浦辺史—その歩みと仕事—」、浦辺史『日本の児童問題』所収、新樹出版、1976年5月、296-333頁
- 宍戸健夫・水野恵子『解題 季刊保育問題研究1号～40号』新読書社、1981年7月
- 宍戸健夫「第一回全国保育問題研究会の開催」全国保育団体連絡会編『戦後の保育運動』、1988年8月、181-186頁
- 宍戸健夫『土筆の記 私の履歴書』宍戸先生の退職を祝う会 編、1996年3月
- 宍戸健夫「日教組の第一回教育研究全国集会」 保育団体連絡会編『戦後の保育運動』草土文化、1988年8月
- 宍戸健夫+愛知県保育問題研究会史編集委員会『あしたの子ども 愛知の保育問題研究会の歩み』新読書社、2002年6月
- 宍戸健夫「保育運動」保育小辞典編集委員会編『保育小辞典』大月書店、2006年
- 柴田敏夫「私保連運動の中で」『塩谷アイと保育運動』塩谷アイ小伝刊行会、1980年8月、23-35頁
- 島田正蔵「クスノキクラスの教育」成城小学校教育問題研究会『教育問題研究』1927年4月号、20-36頁
- ショーン、ドナルド『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』佐藤学・秋田喜代美訳、ゆみる出版、2001年5月
- 白川渥『村梅記』昭森社、1942年1月
- 諏訪きぬ「保育政策の研究」東京保育問題研究会編『伝えあい保育二五年』文化書房博文社、1983年9月、144-163頁
- 諏訪きぬ「高度経済成長と保育要求の高揚」浦辺史・宍戸健夫・村山祐一編『保育の歴史』青木書店、1981年4月、206-248頁
- 諏訪義英『保育の思想家庭教育と幼・保教育の構造』風媒社、1972年4月
- 末広徹太郎「セツルメント」『岩波講座教育科学10巻』所収、岩波書店、1932年
- 鈴木とく子（鈴木とく）「無産者の託児所を語る」『婦人文芸』、1936年1月
- 鈴木とく『感傷 ほいく野 迷いあるき』全国社会福祉協議会、1975年4月
- 鈴木とく『保育は人間学よ』小学館、2000年7月
- 住野茂子（鈴木俊子）「託児所に働いた経験」『婦人の友』、1933年6月、113-117頁
- 鈴木俊子「亀戸無産者託児所のころ —母・子・保母—」井野川潔・森谷清・柿沼肇 編『嵐の中の教育 1930年代の教育運動』、1971年12月、新日本選書、305-310頁
- 鈴木鳴海『日本の保母』三一書房、1964年11月
- 関根正一『シジフォスの仲間たち 開かれた大学からのレポート』新評論、1980年10月
- 全国私立保育園連盟「第3回全国私立保育園経営研究集会 分科会報告 第2分科会 地域センターとしての保育所の在り方」全国私立保育園連盟編『私保連運動の推移とその集積 —全国私立保育園研究集会報告集—（第1回より第8回まで）』、1965年、18頁、日本社会事業大学図書館所蔵
- 副島はま「保母は飢餓給料」『民主保育ニュース1号』1946年11月14日（松本園子編『編集

- 復刻版 民主保育連盟資料』六花出版、2015年4月、8頁)
- 大門正克『岩波ブックレット・シリーズ <日本近代史>11 明治・大正の農村』岩波書店、1992年5月
- 大門正克『民衆の教育経験 農村と都市の子ども』青木書店、2000年5月
- 高瀬慶子「弥次衛保育園その後 市長に送った嘆願書の余波」『月刊保育問題研究』、1962年9月、3頁
- 高島進「浦辺史教授の人と業績」『日本福祉大学研究紀要』第28号、1976年3月、5-28頁
- 高島進「日本福祉大学の歴史と社会福祉研究」『福祉研究』86号、1998年、1-20頁
- 孝橋正一『全訂 社会事業の基本問題』ミネルヴァ書房、1962年
- 高山潔「教育の個人化運動 —ダルトンプランとウキネトカプランの比較」『教育問題研究』第64号、1925年7月、28-55頁 及び 同誌第65号、1925年8月、27-52頁
- 竹内真一・碓井正久「わが国における労働者サークルの歴史的発展過程」『東京大学教育学部紀要』第4巻、1960年、1-26頁
- 竹前栄治『占領戦後史』岩波書店、1992年8月
- 谷川正太郎「民間保育運動の意義」羽仁説子 編『新しい保育園の運営』博文社、1955年3月、13-25頁
- 田村久子「保母の給与について—保母の生活実情調査の中間報告」『民主保育ニュース3号』1947年3月10日（松本園子編『編集復刻版 民主保育連盟資料』六花出版、2015年4月、8頁）
- 塚本哲・浦辺史・大塚達雄・孝橋正一監修『社会福祉事業辞典』ミネルヴァ書房、1966年4月
- 勅使千鶴「民間における保育運動」古木弘造編著『幼児教育の基礎』黎明書房、1974年5月、146-151頁、146頁
- 東海ジェンダー研究所編『資料集 名古屋における共同保育所』日本評論社、2016年12月
- 東京の満蒙開拓団を知る会『東京満蒙開拓団』ゆまに書房、2012年9月
- 東京保育問題研究会編『伝えあい保育二五年』文化書房博文社、1983年9月
- 鶴見俊輔「戦後日本の思想状況」『現代思想 現代日本の思想』岩波書店、1957年11月、49-86頁
- 戸塚廉「新興教育同盟支部づくり」国分一太郎 編『石をもて追われるごとく』英宝社、1956年11月
- 戸塚廉「創造的な教育実践をめざして—雑誌『生活学校』の運動—」大槻健・寒川道夫・井野川潔 編『いばらの道をふみこえて』民衆社、1976年8月、82-95頁
- 留岡清男「戦争と地震と飢饉 —産婆と看護婦と保母—」『保育問題研究』第2巻5号、2-5頁
- 中來田敦美「子どもの貧困対策のためのプラットフォーム」としての学校に関する一考察：浦辺史の歩みに着目して」京都大学教育学部教育課程・教育指導研究室『教育方法の探究』第24巻、2020年、73-80頁
- 中村千代「保母会結成と童謡デモ」植山つる・浦辺史・岡田正章 編『戦後保育所の歴史』全国

- 社会福祉協議会、1978年2月、117-121頁
- 長田新『ペスタロッチの教育思想』金港堂、1927年
- 名古屋保育問題研究会 編『レンガの子ども ヤジエセツルメントの実践と理論』、1963年1月
- 中山芳美「戦後保育政策の史的考察（その4）」『帯広大谷短期大学紀要』34号、1997年3月、47-58頁
- 中山芳美「戦後保育政策の史的考察（その5）—量的視点を中心に」『帯広大谷短期大学紀要』36号、1999年、93-106頁
- 野澤祥子「保育」秋田喜代美監修『保育学用語辞典』中央法規、2019年12月、4頁
- 野本正「闘ふ児童 再度校長排斥をストで戦ふ —東京府下潤徳小校 児童盟休—」『新興教育』第1巻第3号、1930年11月、48-51頁
- 橋本弘子『戦後保育所づくり運動史 「ポストの数ほど保育所を」の時代』ひとなる書房、2006年
- 蓮実珂川『村夫子：教育小説』育成会、1908年4月
- ハーバーマス、ユルゲン・『公共性の構造転換』未来社、1973年6月  
(Habermas, Jürgen, *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Neuwied.*, 1962)
- 秦安雄「土方康夫先生を偲ぶ」土方康夫先生追悼編集委員会編『明日に向けて生きる力を』1989年11月
- 秦安雄「私と日本福祉大学—教育・研究46年—」日本福祉大学社会福祉学会 編『福祉研究』91号、2002年5月、18-30頁
- 畑谷光代『伝えあい保育の誕生』文化書房博文社、1968年9月
- 萩原久美子「保育士の労働実態と労働組合活動に関する調査報告書」『社会政策』8巻3号、2017年3月、62-78頁
- 羽仁説子 編『新しい保育園の運営』博文社、1955年3月
- 羽仁説子『幼年教育五十年 子どもは未来のもの』草土文化、1975年12月
- 濱島良知「国立身体障害者更生指導所の日々」『PTジャーナル』28巻1号、1994年1月
- 早川正逸「学級経営の実際」『教育問題研究』第72号、1926年3月、34-41頁
- 原哲夫「教員俸給並その他一切義務教育費の資本家國家全額負擔運動」『新興教育』、1932年3月号、93-100頁
- 原田省三「私を導いてくれた師の影」前掲、「浦辺史先生米寿記念誌」刊行準備会『昭和史を共に生きて』170-171頁
- 被災学生を守る会編集委員会『伊勢湾台風 —被災学生救援のために—』、1960年3月（名古屋大学図書館所蔵）
- 土方康夫（1959）特報 伊勢湾台風による被災地の保育活動ルポ（その2）保育所の復の復旧活動に従事して 保育の友 7（12） 17-19
- 土方康夫先生追悼編集委員会編『明日に向けて生きる力を』1989年11月
- 土方弘子「伊勢湾台風とヤジエ・セツルメント保育所」全国保育団体連絡会編『戦後の保育運

- 動』草土文化、1988年8月、154-160頁
- 土方弘子「枳中共同保育所の誕生」『日本福祉大学50年誌』編集委員会『日本福祉大学50年誌』日本福祉大学、2003年10月
- 日高六郎「世代」『現代思想 現代日本の思想』岩波書店、1957年11月
- 福島正夫・石田哲一・清水誠編『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社、1984年6月
- 福知トシ「民主保育連盟の活動に参加して」全国保育団体連絡会 編『戦後の保育運動』草土文化、1988年8月、37-41頁
- 福元真由美『都市に誕生した保育の系譜』2019年、世織書房
- 藤岡貞彦「経済成長下の教育改革」宮原誠一・丸木政臣・伊ヶ崎暁生・藤岡貞彦編『概説 資料日本現代教育史3』三省堂、1979年12月、2-12頁
- 藤田定子「私保労に加入した当時の私 京都私立保育所労働組合」京都私立保育所労働組合『私保労十年の歩み』1972年8月、7頁
- 古木弘造『幼児保育史』巖松堂書店、1949年6月
- ヨハン・ペスタロッチ「第二十二信」田口仁久訳『幼児教育の書簡』玉川大学出版、1983年7月、119-122頁
- 保育問題研究会「ほんとうの明るさをつくるために—保育政策懇談会（仮称）について」保育問題研究会『保育問題研究』（月報）40号、1959年1月
- 前田卯門「教員組合をつくって」国分一太郎 編『石をもて追われるごとく』英宝社、1956年11月
- 牧野修二「保育と保母の生活」『保育問題研究』（月報）21号、1957年6月
- 増淵穰・黒滝チカラ「教労 新教の教育運動 暁の光を招く教室」教育科学研究会編『教育』9号、1965年9月、112-124頁
- 増淵穰「革命的な教育労働者組合の結成と合同問題」『嵐の中の教育』所収、新日本選書、1971年12月、163-169頁
- 増淵穰『教育運動小史』新樹出版、1972年7月間瀬正次「わが青春への回想 —文学青年から教師へ—」福島正夫・石田哲一・清水誠編『回想の東京帝大セツルメント』日本評論社、1984年6月、233-240頁
- 松田解子「帝大セツルメントと亀戸無産者託児所」『回想の森』新日本出版社、1979年107-120
- 松田道雄「巻頭言」『関西保育問題研究』1962年7月号、1頁
- 筆者不明（松永健哉）「創刊の言葉」児童問題研究会『児童問題研究』、1933年7月号、6-7頁
- 松永健哉『五分の魂の行方』大空社、1988年9月
- 松本園子「初期の六年間—一九五三—一九五八年—」『伝え合い保育25年』文化書房博文社、1983年9月、20-29頁
- 松本園子『昭和戦中期の保育問題研究会 保育者と研究者の共同の軌跡』新読書社、2003年8月
- 松本園子『証言・戦後改革期の保育運動 民主保育連盟の時代』新読書社、2013年5月、民

- 主保育連盟「民主保育連盟趣意書」1946年、松本園子 編・解説『民主保育連盟資料』六花出版、2015年4月、135頁
- 宮原誠一「教育への反逆 ——新教・教労の活動へ——」井野川潔・森谷清・柿沼肇 編 『嵐の中の教育』新日本出版社、1971年12月
- 中条（宮本）百合子「子供・子供・子供のモスクワ．新しきシベリアを横切る」『改造』、1930年10月
- 宮本百合子『乳房』「中央公論」1935（昭和10）年4月号
- 山川均『資本主義のからくり』プロカルト叢書刊行所、1925年
- 山口近治『治安維持法下の教育労働運動』新樹出版、1977年12月
- 山下徳治『新興ロシアの教育』鐵塔書院、1929年
- 山下徳治「新興教育の建設へ ——教育者の政治的疎外——」『新興教育』創刊号、1930年11月、4-15頁
- 藤井克美「大学における新しい障害学生支援の取り組み 日本福祉大学の場合」『障害者問題研究』35巻1号（129）、2007年5月、19-25頁
- 藤岡貞彦「経済成長下の教育改革」宮原誠一・丸木政臣・伊ヶ崎暁生・藤岡貞彦編『概説 資料日本現代教育史3』三省堂、1979年12月、2-12頁
- 森透「「新教」「教労」の運動（1）」『新興教育復刻版月報』No.1、白石書店、1975年4月、7-12頁
- 森谷清「解題／『教育労働運動小史』と増淵穰」増淵穰『日本教育労働運動小史』新樹出版、1972年7月、330-350頁
- 三輪泰史「一九五〇年代のサークル運動と労働者意識 ——東亜紡績泊工場「生活を記録する会」にそくして——」廣川貞秀・山田敬男編『戦後社会運動史論 1950年代を中心に』大月書店、180-211頁
- 矢沢進『保育運動試論』ささら書房、1983年
- 矢沢進『保育労働運動への提言』ささら書房、1987年
- 矢沢進『保育労働運動の探求』あいゆうぴい、2002年4月
- 山田清人『教育科学運動史 一九三一年から一九四四年まで』国土社、1968年11月
- 山中亘『ボクラ小国民』講談社文庫、1989年8月
- 義基祐正「戦前の保育労働者状態と社会的地位」垣内国光編『日本の保育労働者』ひとなる書房、2015年7月、47-81頁
- 義基祐正「戦前・戦中期（1925-1945）の浦辺史の子どもの生活問題の構造的把握についての考察」『社会事業史研究』53号、2018年、83-94頁
- 吉田久一『日本社会事業の歴史』1960年、18頁
- 鷺谷善教「社会事業従事者の組織とその活動」日本社会事業大学編『戦後日本の社会事業』勁草書房、1967年2月、405-422頁
- 鷺谷善教「雑誌「社会事業研究」の思い出」『季刊福祉問題研究』創刊号、1969年1月、32-36頁

鷺谷善教「戦後改革の修正と保育」浦辺史・宍戸健夫・村山祐一 編『保育の歴史』青木書店、  
1981年4月、168-204頁

鷺谷善教「社会事業研究会と保母」保育団体連絡会編『戦後の保育運動』草土文化、1988年8  
月、82-91頁

鷺谷善教「東京保母の会を結成」保育団体連絡会編『戦後の保育運動』草土文化、1988年8  
月、87-91頁

XYZ（筆者不明）「豊島師範ストライキ情報」『新興教育』第2巻2号、1931年2月、40-43  
頁